理齋隨筆 二

イ 5
1612
2

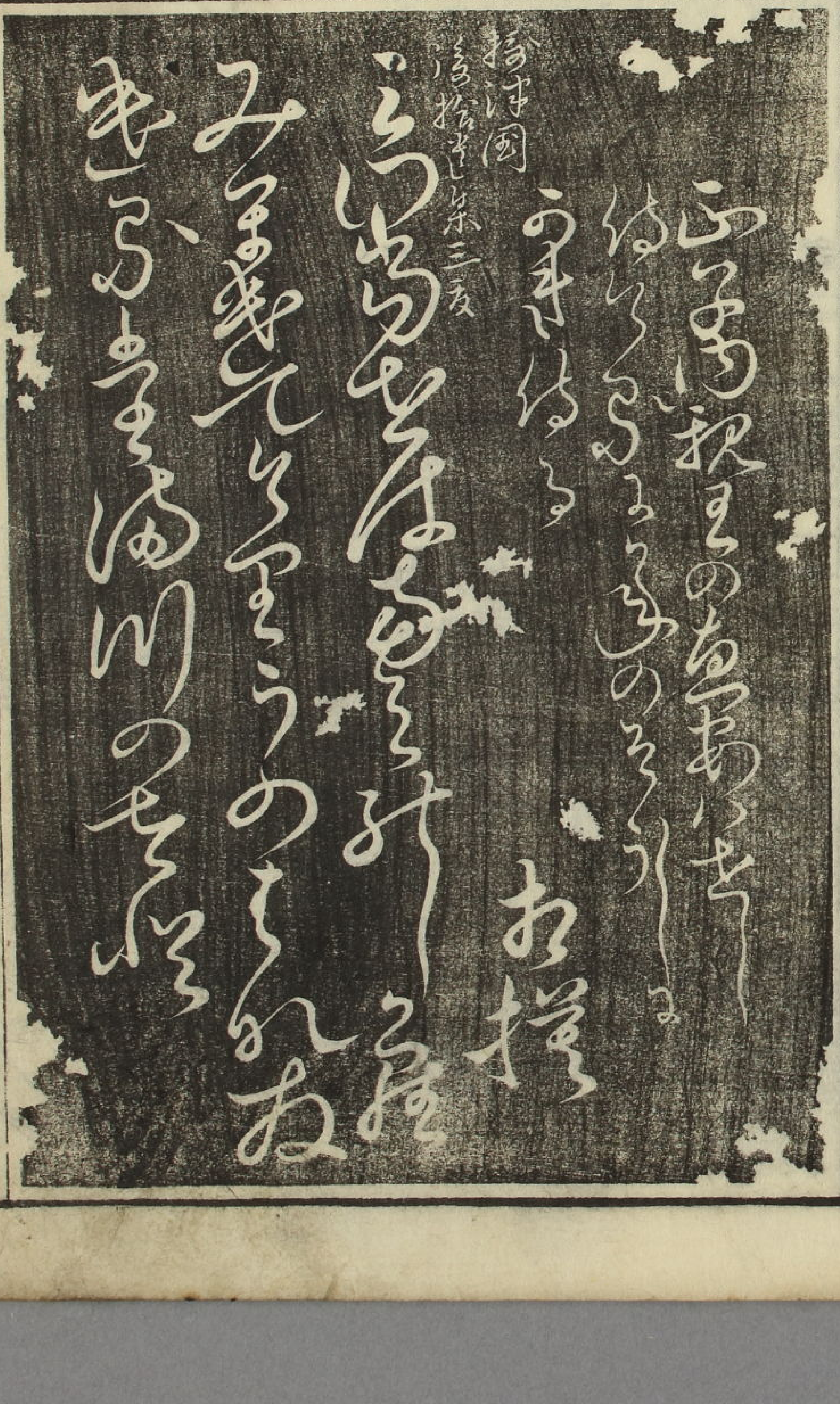
京都大学図書
志田蔵書之章
門 號1612 巻2

理齋隨筆巻之二目次

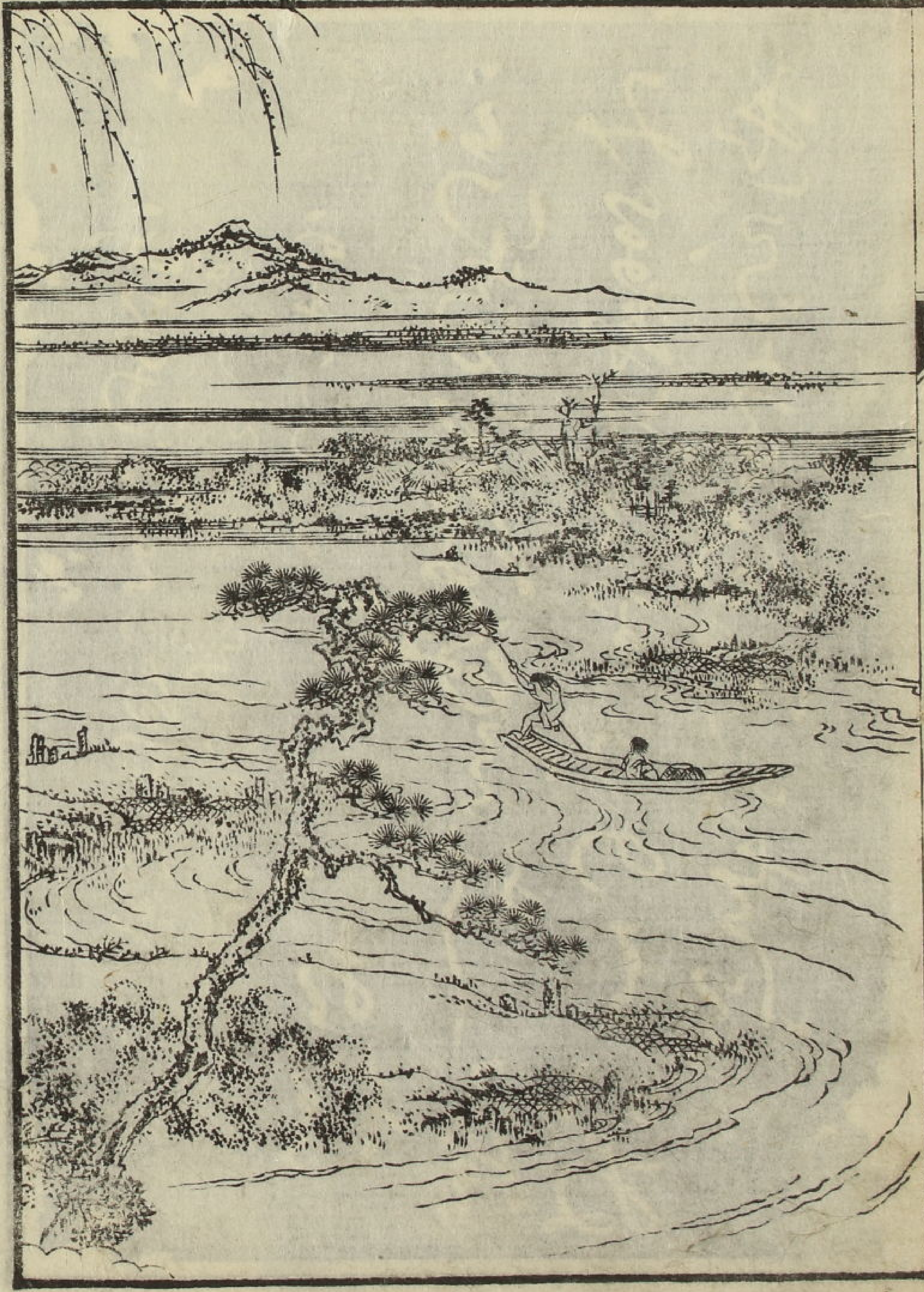
壹一熊谷次郎直實
貳一秀吉朝鮮を征する
三一朝鮮征伐首途を賀する
四一高貴の人ハ安逸
五一むかし大閤秘蔵の松
六一八橋の燕子花
七一蠻銘のたとへの色
八一友千鳥の判じ物
九一頼政のむくら
十一娘の尊の捨所
十一一鵺の考
十二一紙張の戯き書
十三一沢庵和尚の漢和
十四一官位相當
十五一醫師痛家の十慎
十六一屍風ニ色紙を張
十七大江匡房の言葉

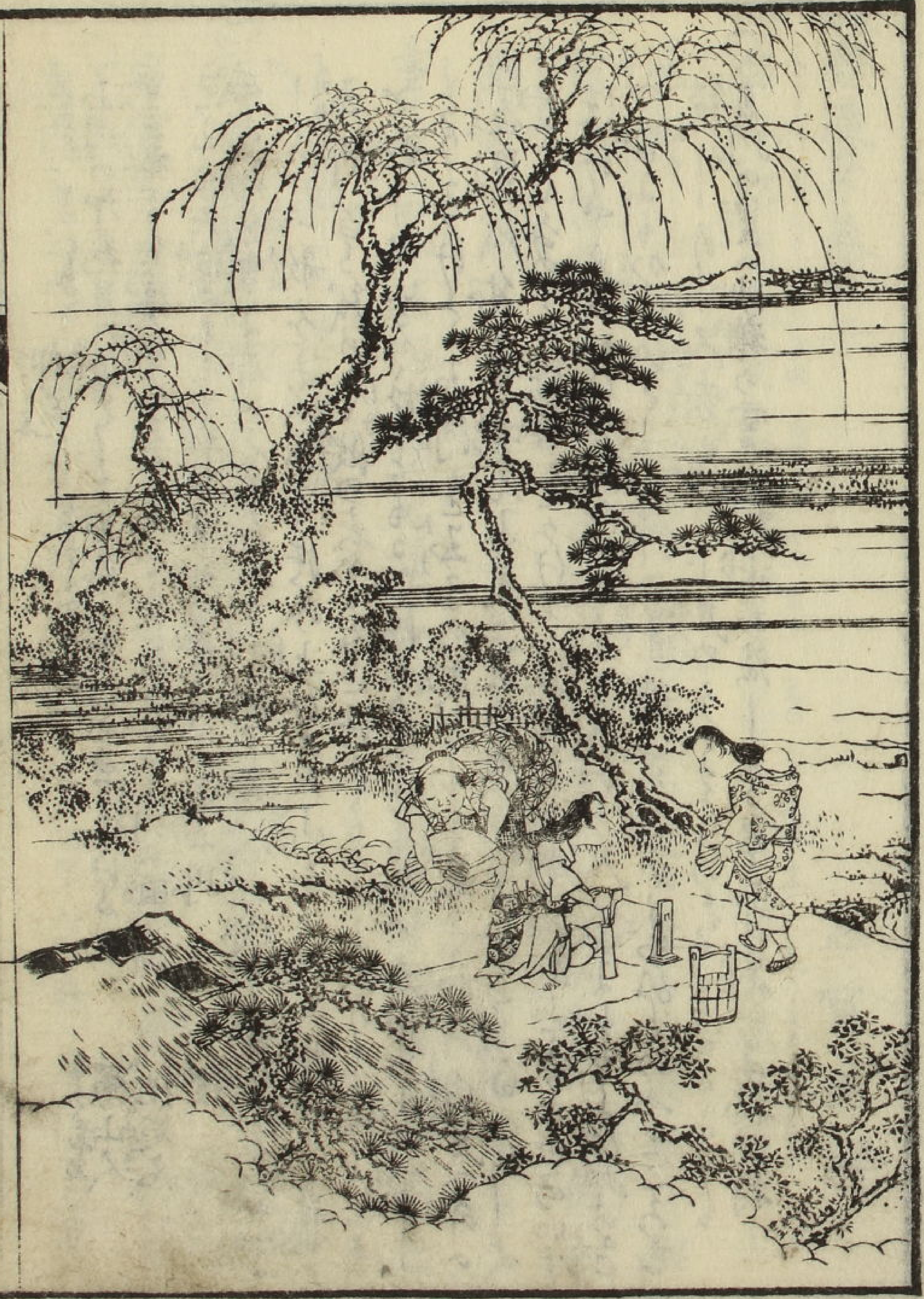
千載集

源俊頼朝臣



尾陽 萬國書物所 梧鳳軒印





卯花

○玉川の卯花月は浪ちる玉兎とぞいふ由ありける　蜀山人

○黒幕に志ら浪出てくだりけりとうの花さける玉川の垣　紀定丸

○「見ても世々浪の志がらみかけてげり卯の花はまさる玉川」　理齋

卯の花を雪にまがへてさくしんぶりし世より今の代までくの二アらの歌がらは
しもく此歌をあはれとよみ上げるは山吹も作りぬべし　お換へ
玉川あるは数多く波の志がらみと読みよりしたるおもかげ
と狂じていひたる記どもはべりしかどもその志卯は小皿へ出し
とりはづけしく玉河を玉子の皮としたまさぐ卯の白身へ卯の
花盛我身にて喰んも志ゆ知べからん なされど上白のめしく
煮たる物の花菜をうけて色はちと黒けれどもきらむのいと
ほけてる我かけらんは志がらみのからの字にもうつし卯の
の名にもかなひて二日酔の茶漬には持て来ひといふところ

○蛇足もあり又縁黨の下戸のうへにもいはれて
玉川の里は砂糖の雪白い氷なるしと見る卯の花　手柄岡持

理齋随筆巻之二

志賀忍輯

㊀熊谷次郎直實は桓武天皇の裔平直方の後孫直貞の子也むかし下野國にて大なる熊出て人に害をなす直方其熊を射殺さし一族集まりて吾輩の頭とも云意にて私の黨の長也と称美せし依て直実をば士の黨の頭領と賞号せらる志乃事藝刕迎接院の縁起にみえたりと云丹治直実とあるまじと東鑑には平とあり

㊁秀吉朝鮮を征したまひしに今日は渡海あすや明日は渡海とてやるまじと世上風説せしが堺の鞘師曽呂利新左衛門といへる滑稽者鞘を製する事上手にていへる

鞘なくもそりありとおもはれぬに刄這入るやうに穿して
曽呂利と呼ばれしものありされバ其頃楽が鉄を灸に
大閤が一六茶碗買ふ様なりてもごとくいあまもご
とられ
申けるよし秀吉傍人に笑はれ大に憤りて曽呂利を召され
て汎しるひろにハ落首様はむかしよりあるならひなれバ上とそ
ばからざる所も是非なしされバ締を立し家令一天の君を
補佐し奉る所の関白職なるを大閤がいへ過言なるかぎ
しまかしハ大閤の身などあらバまたしハ締を處もあるべし
みと畫しくいゝり侍られバ曽呂利かしもいそまうどらく

曰君と天子とハいづれまさりたるや御上なるや
それハ知れたる事なり家ハ臣ゆへいかで天子と比ぶべき
の論もなしと曽呂利曰志らバ尤の怒りるをおるべし
哉まじきハ天子の御事をさして君が代ハ君がため
まをくハ御代と申上る歌に秀吉ほど深く愛し給ひ
く此後ハ大閤の傍に侍して御伽をなし色々おかしき
滑稽ありよく人の知る處なり曽呂利ほどなる痴ものハ今ハ
に及しぬ行なりとも臣あらバ申せらるべくきさんとあり
しかバ
御威勢ぐ三千世界をまで入らむ極楽浄土まで

なりしとぞ

と和睦して再度渡海なく果りしとぞや

三 朝鮮征伐として人々出陣に及し時細川玄旨

からくにの虎みもせずくおそらくなり

と首途祝しけるとぞまもなく異國を征しその年数七

十年の前なり其御文禄二年壬辰八月三日伏見にて淀殿の

御腹に若君御誕生あり拾ひ君と申せ後に従二位右大臣

秀頼公是也石田軍記に文禄元年の冬より淀殿懐胎に

よりて同年の大寺にて高僧を請し大法秘法御祈祷し変

生男子の法然祈りかなひ此まゝ文禄二年八月廿日安産

成就の事に依而御祈祷として大坂城中にて連歌の會を催し

その時の宗匠紹巴の發句に

大盤若なふして女の御祈祷か 紹巴

一二八なりて産の紐とく 昌叱

いま百韻満ずるに若君御誕生ありしを祝儀なりと

とかく

四 高貴の人は日夜美食に飽て安逸に住するが故に多くは八

種〻の病あり然れとも農を業とする百姓は平日麁食を

なして日々耕作に身体を働かしむる故に病の者

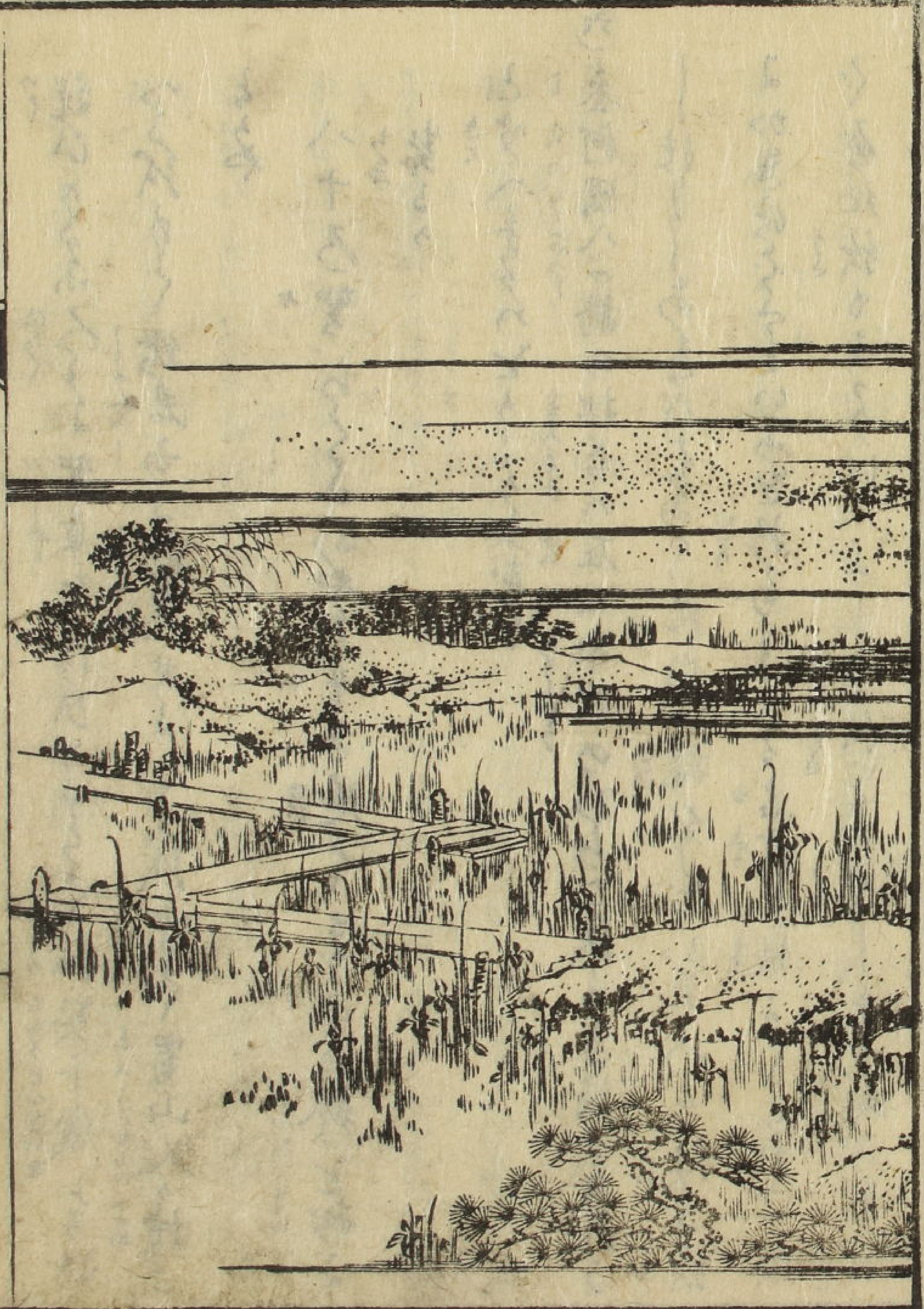
少なしたとへて流水腐らず要樞蝕まざる古人

もいへりこの意に叶ふ墨の蓮之といふめく句よ
精出せバみる者もなし　水車
とんやまき

㊄むかし大閤秀吉めで秘蔵ありし庭前の松枯けりしかバ
ちるかりて憂にへ筆色之しふ滑稽者曽呂利新左衛門こま
と祝しよろこびま川ありく
所秘蔵の所庭の松枯ありて千代のよろひの君よ
由川かなく
変ふ形で大に感じ喜びありしとぞ　文化年中竹腰なる
松の風もなきに大なる枝折より　又何年かなんとくく

異変のわひとすで色く風聞せしよ阿る人の祝し其りし
狂奇よ
千代の松折るれ頭と株よ千ん流く見らど君がよ
ちひへ
是亦れ曽呂利よも劣るまじ纪縁なりまさある人年賀
と祝し　かるよ寿の字餘数四十九あまりあれが四十九の
餘の唱人と悪く不興なりしをある人祝しく
七ら寇七福神よ配らおやらり川れ四千九あらら賀の
あるち
とすだりしといへるもよ纪祝し杖之或人八十の年賀を

中郎
感旅情



頌ひ奉るふ人〳〵に賀章を請ひ奉りしに松契千歳といひ
へる題にて佛君子に勧進せるに題に寄て蜀山人が讀る
うたや

八十の賀らくさおやが生き延てまごも齢を松るに
契るか

と吟へ給へりとかしらぶむや

⑥參河國八つ橋の杜若は在五中将のから衣きつゝなれに
しつましあればはる〳〵きぬる旅をぞ思ふと讀る歌
にかきつばたといふ五文字を折句にしたる名高き詠なりければ次
ぐ無に歌もなかりけるよし其頃をば尽したる處なるべし

とおもひ世に翁塚に杖をおきし句を案じけるにとかく言
よる所なきに言葉もなく〳〵
かきつけたる家も発句のこと絶あり
との一句を残されけると今かしこに碑ありて此句に記せし
例の翁はさとがに名人なる者と侍るなりかゝる事もひあらず
まく李白が黄鶴楼に往て詩を賦さんと思ひ来しくれまべきをや
李白に先立て崔顥が楼にあり詩を作り置きしを見るに
あまりにも出来面白き作意にてこまりてありし一等上へ出る佳
作したるとも人の跡を踏む心地にておもしろからぬとて
そこよりも所に去て金陵の鳳凰臺に登り詩を作り給へり

是等まこと風流のたぐひにて千代の作の趣向といふべし
て我も發句の心ありとたちまち忘れたり余の趣を述たる
よりも格別にまさりて風雅の意味ぬけしと思ひぬ又
名所圖會に卯月のころ八橋の古跡にてかきつばたといふ
五文字の句の末にきくて狂歌よめる
旅袷しがちぶの紫今ハさ杜若そのあとみまくほし
麦の秋。
とあり是ハ業平の和句に對ぶる趣向なるべし　右羅鳥
後人よくもありし參河の八つ橋の姿にく
おもふに三河の沢邊きなく これハ田なりしことありしか

きつ川なるらし
(七)まべく蠻國の名にイギリス。エウロツハ。那ど〻云まで阿蘭人の持
てるゾンガラス。ボウトルなど奇妙の称呼あり往年平賀
源内が持たる平日の道具へ彼國の蠻語をたくはれに名付
たる中にも風流の蚊拂を製したるを振出せバ蚊を
ぶらく取たる故の器物なり是を名づけマアストカアトルと喚ぶの
しれわりろき蠻名をよく覺へ評判せしことありおもしろし
お奉行在る俗に万年糊といふものを木の箱の中へ入その
上紙をもて包み押しめして其の上に隅のところへ少し孔穴を
向けたるものに蠻名を付し人ありオストデールまたは泣上

戸とエフトホエルまくさのおかへのころぶき人をスポントワーヘル
などく名付しものありさる源内よりとづくるべし
(八)左馬頭義朝ハ父六條判官為義の首を打是ニ命を重し
と云る処なれども子として父を殺せし大罪かく悪名を千
歳に傳ふされバ昔の判じものに
よしともがよしなききちの首とりて弓取ながらゆく紙
ともくなり
右弓取とさへいへバ武士のことになるに薬師寺次郎左衛門
ハ法躰となりし後の號に取まぎらはしひらふみかの数なら
ど嗜むべきものハ弓矢也なりと弓矢の礼弓矢の道ならる武

士の事にや侍ん士の乃具なまらバなり後代鎗出来くなり
鎗をもつくるべく道具を成しあと扱右の歌を友千鳥と
判ぜる又舜の父瞽叟人を殺さバ舜天子の位をすてゝ瞽叟
を負ひて海濱に遁る事をいふ孟子の語を模範とせ
んずる義朝かゝる汚名を後世に傳へまじきに惜ひかな
(九)むかし京童の諺に頼政の家に過たるもの七ツまると不足れる
ものニ河ありとりわけしとなりたるもの七河とて第一歌
乃の達人第二渡邊競 家臣 第三木の下鹿毛 馬 第四武庫
知行ト総の古河 第五誉田の庄 第六伶人の面 第七婆娑羅 とまうくさ
不足者三りとて第一位より知行第二世の誉より幸第

三風流まじく下戸と式肉婆娑羅といへる事文選の
注解なれバ婆娑ハ放逸の皃とありまた年紀にむさら
風といへるありまたむさくるしきなどありて其意知がたく
として是を荻生氏に問のぼりけるに答ハ囀日羅ハ
本義金剛と云梵語也金剛ハ眼を瞋らしおそろしき形容
之人の目をおどろかする衣裳なれバ婆娑羅といふこと
と申越しけるさらバ頼政綺羅かざりて人に憚り
しとか斗

⑩

六阿弥陀姥の噂の花実といへる川柳点の句あり是ハ頃彼
岸中に六阿弥陀へ参詣せし老婆ども老婆三四人連立て

あまり姥の噂をあしく取なして罵りあへり川柳点ハ実にも
さもと心に感じ居れど餘り憎気なる申条に予老婆に向ひ
て汝らハ川柳の句ハ後生ぶり罪ある何しのたぐひなるにさ
るならんなど所を新く嫁の噂ハ念仏に換らるハかくして
罪深かるべし嫁ハ咲恵をみやし身の養ひすらも悪し
かるなんけうぞうハ曲くむかさるに参詣あれとゝ申されれ
ば老婆ども聊気がとびしく曰いやしき老婆の事なれどとぞ
家々事有難まくけ度なるハ数々あまでそまこぞこそくく
口に出さねど心にハ川とても胸ぬさまり居るなりされバ彼
岸の功徳あるまくむねに満ちたる賊隠さん為になりくれ

老嫗賣踊陀

語り合ひけるが是まさに阿鼻尾の御影なりと拝まで死亡
しけるハとくもまたく嘘しく止まざ是らハ栖鼠もあげつる
理屈らるまじき事なれども婦人の心根をあかる趣き
なれ淺ましし

(十一)頼政の射られし怪鳥鵺といふもの多くおぼつく鳥ハ猿と
いひとりへる説ありまた字の書にハ鵺文首状如雉而白翼
黄足晝隠山林夜飛為声見其形者少となり鵺なればこそ
来るものある怪獣にて頭ハ猿脊ハ虎尾ハ蛇足ハ狸也さて
其声の如きハ鳴声鵺に似たりといふ一説にハ形あるに
非ず是ハ東宮の御脳申の刻よりはじまり寅の刻に

甚しく巳の刻に終ことを 理齋つらつら考ふるに頼政の射
藝をもつて屋越の蟇目を修せられしならん屋越の蟇目
といへるハ天地四方を射るにまづ四隅を射るに四隅の形
状を表して丑トラ未サル辰ミ戌イ扱この亥のかたちをあらはしき
あるは猪の早太といへる郎等の名を入たるものなるべし一説
たるまた鎌倉実記にハ鵺の事ハ平家物語盛衰記に記せ
是なるに日並の実録に載るをあらまし日並の実録ハいさゝ
かの怪なるまじくとくに記せりかはどの形すに顕て記さるる
を甚不審之一説に云実に載るわるる非鳥なりに載るを設
けくたるらば頭ハ申尾ハ巳足ハ寅のごとくといふかく方角

まこと頼政が弓の徳を表せるといへり私曰氏ハ附會の説なりと
又鎌倉實記ニ云猪鼻早太高直 上累多田源氏太田伊豆八郎廣政子也 或井早太領近江國猪鼻故曰猪鼻
頼政の首を早太うけとり鞍に包みものまで首をうけ東
國に下りしが下総國古我ハ代々の領地なり是ハ彼ところに葬
是後神霊の告によりて此神と祭るとありまた盛衰記平
家物語にハ頼政の首ハ下河辺清長が首をうけく領地古
我に葬るとみへたりおまてにかうしき川柳の句にハ
是

早太ハおめくらく四条へ出しかども
猪の早太さみとた川猶く山路来る

猪の早太猿ぐくとおよそこといひ
出しくもくまでうるめのと早太といひ
(十二)
何人の戯ぞなるしるや紙張の章あり曰
持ちまし紙張ニ十徳ありまず川水のるに盡ず下直是一ツ
蟵を吊けど風引ぞ是二ツ飛外にありて内まよく書
とらるるは眠し是三ツ眼を寛かく蓋を閉けど是
四ツ病もうまんぞ是五ツ用心の為にもなるなれどもよ
し是六ツ手足外より蚊喰ぞ是七ツ諸虫の来る
とる是八ツ冬用ひく寒さ防ぐ是九ツ衾となる
かぬ所ハ紙骨買の龍内是十之其外求ハ是れも

射技
東栄名

えらびて何かあるなるべし

誰勞白猪公自作下帷工眠怪臥雲上
醒疑坐雪中移来満窓月遮障四圍風
紅錦綿張客未知此興濃

⑬あるとき稲葉濃州勤事の暇ありしに或時品川の東海寺
沢庵和尚訪尋られしかハ濃州和尚にむかひてのたまひけるハ
勤仕の長日に退屈せざる法の教諭を請ひ給ひしかハ
和尚言下に筆を採りて無事此日寸陰一尺璧
と書きしやおのづから日く乃別きたまきのふ乃わかるま
ましもあらねバ

⑭濃州この作を讀みて深く感吟ありしより永日長しき
の退屈なかりしとぞ此のりの後世に至るまでも讀者なる
流石の者をとらへて悉く知らるれバ家にかへりて
凡官位おほむね書せる者ハ官と位の上に書せる事なり国守
おほかた大國ハ從五位上上國ハ從五位下中國ハ正六位下
下國ハ從六位下也然るに伊豫守ハ上國なれど從五位下の官
なるに伊豫守從五位下某名也とかく位署ハ自分くなれバ
りまた他よりハ書なりとも又自書く時ハ名の下へ朝臣ホ乃
字を書かざる事なり他より書く時ハ此限りにあらざるは
言姓名とかくものハこれ奏状を徑ての書及上表の

（十五）
位署に入用あるとみゆるぞ
ある書に曰く医師に十の徳あり病者に十の慎あり
といふことを人より伝聞のいへるまゝにしるせるを
醫者十慎あり
第一慈悲心　第二学問に功を積む事　第三脈をあきらか
むべし　第四病源を知るべし　第五運気を知る事
第六経絡をあきらむべし　第七能毒を知る事
第八薬製に念を入る事　第九配剤を要として友を嘲
るべからず　第十欲をはなれ貴賤貧富を隔てず慈く
て療治を施すべし　そも医道といふは家が身の上富栄

んことをねがはず万民の病を愈し諸人の患苦を救ひ
助くる為に志すなり
病者十慎あり
第一に名医を撰ぶ事　第二薬を大切にして呑捨
薬なからに念を入るべし　第三はやく療治をうくべし
第四婬欲を絶べし　第五かんしやくを慎む事なれど
第六物を深く案ずべからず　第七飲食を慎む事
第八起居を大事にすべし　第九巫女山伏の言葉を信
ずべからず　第十薬代を惜む事なかれ

（十六）
屏風に色紙をはるとき法八寸に六寸七分にきるなり

一枚を二色に染わけたるもあり青黄赤白黒の五色に染たるを
是古実なりとぞ

（十七）大江の匡房の言葉に人後天地生知天地之始先天地死
知天地之終天地之終始在一身この語をよくよく熟読すと
る時は天地人の三才に洩るゝなり萬物の霊長たる貴きを
とうべ知べし天の高く日月の遠きも坐して窺ひ知る
事によ法の道に秀る人なれば変を知古人へ生まれの
まさるに封疆なるべし死しくは又まさるに廟食せん事を称か
ひしもまた宜なるかなや凡文武の藝を始として諸々
の業あまたなり其事を学ぶにまづ其道の奥域その

道具の利用かぎりなくして筆に尽しがたし医を学ぶべき病
の事業のと読まれ書き算用農工商のつとめて文字の義
理草木禽獣の名あるは今日交る交眼に経ぬ耳に聞きおかると
わかるゝのたべ中く数へつきるまじ徳ありとも其文の浅
深によりてなおの理に甚ならずば皆なく覚え
あるより実に人として今の人は霊妙不思議のものなり然
斯く貴き人身を稟ながら唯何事もなさずくらして世をば過ぐ
なるはもろく子が如く老のまゝにあらんとすれば犬猫の
斃るゝ如く死るんとは恥かしき事ならずや志あらば若き時
より何くれのなるりとも心を潜めて学べは一藝の秀た

らんまハ人と生れし甲斐あるなし後悔まさるすなり
れ日月人を待ずされど老来如何ともしがたし嗚呼悲哉
㊅景行録曰明旦の事薄暮かならずしもはかられず薄暮乃
事晡時必ともはかられずとも天に不測の風雲あり人に旦夕の
禍福ありと宜なる哉「あすありとおもふ心のあだ桜
夜半にあらしの吹ぬものかハ古歌の意思ふべしなる
べし

理齋随筆巻之二終

尾陽 萬國書物所 梧鳳軒 印